

外国人労働者向け日本語・日本文化公開講座の試み

濱田 美和
田中 信之

A Trial Japanese Language and Culture Seminar for Foreign Workers

HAMADA Miwa
TANAKA Nobuyuki

要 約

富山大学国際機構では、2020年2月に外国人技能実習生向けの日本語・日本文化講座を試行的に開催した。2時間の講座で、富山大学の学生との会話、日本語教材の紹介、日本文化体験という流れで行った。受講者アンケートの結果から、講座に参加した技能実習生の多くが、動画サイトや学習アプリを利用したり日本語能力試験対策の問題集を使ったりしながら独学で日本語学習を行っていることがわかった。日本語学習の困難点として、先生がいなくて1人で学習する難しさや働きながら学習を継続する難しさに関するコメント、また、日本人との会話の難しさや漢字学習の難しさに関するコメントが多く見られた。本公開講座でよかったものとして7割以上の受講者が日本人学生との交流、留学生との交流、書道、茶道、日本語学習サイト・アプリの紹介、折り紙を選択しており、学生との会話、日本語教材の紹介、日本文化体験、いずれも一定の評価が得られた。

【キーワード】 外国人労働者 技能実習生 公開講座 日本語学習 日本文化体験

1 はじめに

厚生労働省富山労働局の2020年1月31日の発表によると、2019年10月末現在、富山県の外国人労働者数は11,844人、外国人労働者数を雇用する事業所数は1,925か所で、いずれも2007年に届出が義務化されて以来、過去最高を更新している。国別では、ベトナム3,968人(33.5%)と中国2,962人(25.0%)が多く、さらに、対前年伸び率においてもベトナムは27.1%増と最も高く、続いてインドネシア25.3%増となっている。在留資格別では技能実習6,209人(52.4%)が半数以上を占め、対前年伸び率も19.3%増と最も高く、富山県で外国人労働者が増加した要因としても、技能実習制度の活用により技能実習生の受入れが進んでいることが挙げられている。産業別では製造業が5,905人(49.9%)で最多となっている。

厚生労働省2020年1月31日発表の全国平均と比べると、全国においても国別の状況は中国(25.2%)とベトナム(24.2%)が上位2か国、対前年伸び率もベトナム(26.7%増)とインドネシア(23.4%増)が上位2か国となっている。富山県は全国平均よりベトナム人労働者の割合がやや高くなっていることがわかる。全国の在留資格別では技能実習は23.1%となっていて、富山県は技能実習生の占める割合が全国平均の倍以上と非常に高い。また、産業別では全国でも製造業が最多だが、全国では29.1%、富山では49.9%となっていて、製造業での受入れの多さも富山県の特徴として挙げられる。

富山県は全国を上回る速さで少子高齢化が進んでいて、特にものづくり人材の量的な確保の面で厳しい状況にあるとされている。製造業が盛んな富山県において、外国人労働者、特に技能実習生は今後ますます重要な役割を担っていこう。県でも2019年9月に従来の多文化共生推進プランに、「外国人材活躍」の観点を盛り込んだ「富山県外国人材活躍・多文化共生推進プラン」が新たに作成され、外国人が活躍する受入企業への支援も行われるようになってきている。県内の在留外国人が増加する中、大学においても地域の日本語教育への貢献を求める声が上がっている。そこで、富山大学の日本語教育にかかわるリソースをいかに活用できるかを探るため、外国人労働者(技能実習生)向けの日本語・日本文化講座を2020年2月に試行的に開催することにした。本稿では、本公開講座の概要および講座

受講者を対象に行ったアンケート結果を報告する。

2 公開講座の概要

本公開講座は初の試みであるため、受講対象を絞って実施することにした。以下、募集方法、実施内容の順に述べる。

2.1 募集方法

公開講座に先立ち行った富山県内企業 142 社の調査結果（田中・濱田・副島 2021）を基に、日本語能力が初級レベルの技能実習生（以下、実習生）を対象とした公開講座を、2020 年 2 月 15 日（土）に試行することにした。公開講座の開催場所である富山大学五福キャンパスに近い企業を選び、当日に参加可能かどうか（勤務日でないか、社内行事がないか）を確認した上で、公開講座の案内（実習生の母語で作成）を送付して参加者を募った。事前申込みとし、申込み状況を見ながら会場の手配や資料の作成等の準備を進めた。

2.2 実施内容

2020 年 2 月 15 日（土）に富山大学五福キャンパス共通教育棟 A22 教室で、表 1 のスケジュールで行った。

表 1 スケジュール

時間	内 容
9:30	受付開始（留学生が大学正門から実習者を教室まで誘導）
10:00	開会、日本語を話そう（日本人学生、留学生との会話）
10:45	日本語教材（サイト・アプリ）の紹介
10:50	日本文化体験（茶道、書道、折り紙）、日本語教材（書籍）展示
11:55	受講者アンケート記入
12:00	閉会

国際機構の教員 2 人（筆者ら）が講師を務めた。ティーチングアシスタントとして富山大学の日本人学生 6 人および外国人留学生（以下、留学生）7 人（ベトナム 3 人、中国 3 人、インドネシア 2 人）の協力を得た。

富山県内企業 7 社（いずれも製造業）の実習生 27 人（ベトナム 16 人、中国 7 人、インドネシア 4 人）が参加した。

以下、当日のスケジュールの順に実施内容の詳細を述べる。

2.2.1 日本語を話そう

受講者を 6 グループに分けて会話を行った。各グループ、日本人学生がファシリテーター、留学生が必要に応じ通訳してサポートする分担としたが、日本人学生も留学生も会話に参加して、自ら積極的に話すよう指示した。また、受講者の多くは初級レベルの日本語能力を有することから、「やさしい日本語」¹⁾を用いて会話するよう事前指導を行った。教員 1 人が全体のファシリテーターを務め、グループで会話したあと、全体で共有するという流れで、①自己紹介（趣味、自分を動物にたとえると）、②グループ名の決定、③休日に行っていること、④最近楽しかったこと・うれしかったこと、⑤最近嫌だったこと・困ったこと、以上の 5 テーマで会話を行った。

2.2.2 日本語教材紹介

日本語学習に役立つサイト・アプリの情報リスト（ベトナム語版、中国語版、インドネシア語版）

を配布し、リスト中のいくつかのサイトの画面をプロジェクターで映して使い方などを説明した。そして、日本文化体験の時間に日本語教材の展示ブースを設け、日本語の教科書や問題集の展示のほかに、ノートパソコンとタブレット端末を各1台用意して、紹介したサイト・アプリを閲覧できるようにした。

2.2.3 日本文化体験

日本文化体験は教室内に茶道、書道、折り紙の3ブースを設け、受講者は自由に各ブースを訪れ、日本文化を体験するという内容である。茶道ブースでは日本人学生2人、書道ブースでは日本人学生1人と教員1人、折り紙ブースには日本人学生2人が体験講座の講師(茶道や書道教室等で学んだ経験有)を務め、留学生は同国出身の受講生をサポートする形で実施した。

茶道体験は、日本人学生が点てた抹茶を干菓子とともに味わうという内容である。お手前や作法の解説は、日本人学生が話した内容を留学生が適宜通訳して対応した。

書道体験は、まず、受講者各自が書きたい字や言葉を考え、日本人学生に伝える。次に、日本人学生が半紙に書いた手本を見ながら数枚の半紙で書く練習したあと、色紙に清書する。最後に色紙に遊印を押して作品を仕上げるといった内容である。

折り紙体験は、事前に準備した折り紙の作品の中から受講者が好きなものを選んで、その作品の折り図を見ながら自分で折るといった内容である。必要に応じて日本人学生や留学生が折り方の説明をした。

3 受講者アンケート

本公開講座開催の主な目的は、地域の外国人労働者の日本語能力と日本語学習のニーズを把握すること、そして、どのような公開講座が求められているのかを探ることである。そこで、受講者の日本語学習状況および本講公開講座への感想についてのアンケート調査を実施することにした。

3.1 実施方法

公開講座終了時に受講者に調査票を配布し、調査の趣旨を説明し協力を求めたところ、全員から同意が得られたため、その場で記入を依頼し、回収した。

質問内容は、質問1: いつ日本に来たか、質問2: 日本に来る前に何か月日本語を学習したか、質問3: パソコン、スマートフォンを持っているか、質問4: 日本に来てからどのような方法で日本語を学習しているか(①教科書、②パソコン、③スマートフォン、④テレビ、⑤その他、⑥勉強していない、以上の6選択肢から複数回答)、質問5: 日本語学習で困っていること(自由記述)、質問6: 公開講座でよかったもの(①日本人学生との交流、②留学生との交流、③実習生との交流、④日本語教科書の紹介、⑤日本語学習サイト・アプリの紹介、⑥茶道、⑦書道、⑧折り紙、以上の8選択肢から複数回答)とその理由(自由記述)である。以下、順番に結果を述べる。

3.2 分析結果

3.2.1 渡日時期

27人の渡日時期は2017年11月初め～2019年10月初めで、年別の内訳は2017年1人(3.7%)、2018年6人(22.2%)、2019年20人(74.1%)で、渡日して1年未満の実習生が7割以上を占めた。

3.2.2 来日前の日本語学習期間

来日前の日本語学習期間は、最短は3か月、最長は18か月だった。3か月7人(25.9%)、4～6か月10人(37.0%)、7～9か月5人(18.5%)、10～12か月4人(14.8%)、18か月1人(3.7%)で、学習期間半年以下が全体の6割強を占めた。

3.2.3 情報通信機器の保有状況

パソコン、スマートフォンを持っていると回答した人数は、パソコン12人(44.4%)、スマートフォン27人(100%)で、パソコンの保有率は5割を切ったが、スマートフォンは全員が所有していた。

3.2.4 来日後の日本語学習方法

質問4「日本に来てからどのような方法で日本語を学習しているか(選択・複数回答)」で最も多かった回答はスマートフォン20人(74.1%)、次が教科書18人(66.7%)だった。続いて、勉強していない3人(11.1%)、パソコン2人(7.4%)、テレビ番組1人(3.7%)だった(図1)。その他を選択した3人のうち2人はそれぞれ「会社の人と話します」「日本語のボランティアクラスで勉強しています」という回答で、1人は無記入だった。

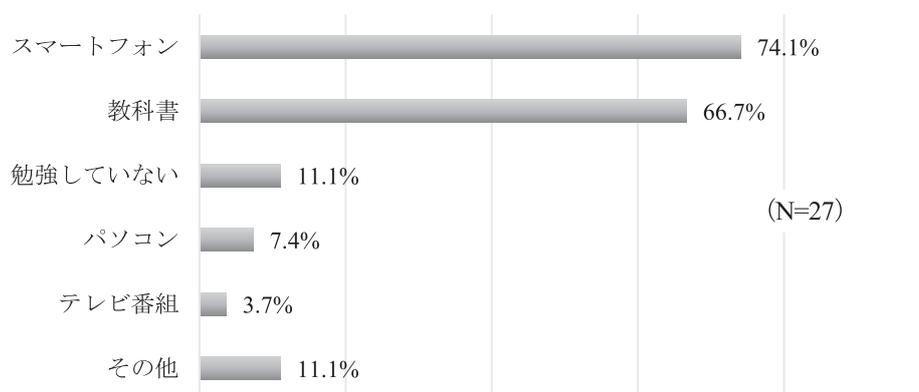


図1 来日後の日本語学習方法(複数回答)

複数選択者が多く、スマートフォンと教科書の両方を選択した人が13人、スマートフォンのみを選択した人が7人、教科書のみを選択した人が3人だった。パソコンを選択した2人はスマートフォンと教科書も選択していて、テレビ番組を選択した1人は教科書も選択していた。

3.2.5 学習リソース

質問4でスマートフォン、パソコンを選択した人にアプリ・サイト名、教科書を選択した人に教科書名、テレビ番組を選択した人にテレビ番組名を、それぞれ自由記述でたずねた。

スマートフォン、パソコンを選択した20人のうち10人がアプリ・サイト名を記載していた。「Mazzi」「YouTube」各3人、「DUNBMORI」「Kanji360」「NHK Easy News」「NHK」「Nihongo Benkyou」「Nihongo-Pro」「VnJPclub」「辞書」各1人だった。「Mazzi」「Kanji360」「VnJPclub」はベトナム人学習者向けの日本語学習アプリ、「DUNBMORI」はベトナム人学習者向け YouTube チャンネル、「Nihongo-Pro」はオンラインプライベートレッスンである。「辞書」はおそらく手書き機能を使っている漢字検索も可能な英和・和英辞書サイトの「jisho」。「Nihongo Benkyou」はNHK WORLD-JAPANが18か国語で提供している日本語学習コンテンツ「やさしい日本語」のインドネシア語版「Belajar Bahasa Jepang」のことだと思われる²⁾。

教科書を選択した18人のうち10人が書名を記載していた。『みんなの日本語初級』(スリーエーネットワーク)5人、『新完全マスター』(スリーエーネットワーク)3人、『日本語総まとめ』(アスク出版)、『耳から覚える日本語能力試験』(アルク)各2人、『新日本語の基礎』(スリーエーネットワーク)、『日本語能力試験N3』³⁾各1人だった。『みんなの日本語初級』と『新日本語の基礎』は初級の総合教科書、

『新完全マスター』と『日本語総まとめ』と『耳から覚える日本語能力試験』は日本語能力試験対策の問題集である。『耳から覚える日本語能力試験』と回答した1人は「N3」と日本語能力試験のレベルも記載していたが、ほかはレベルの記載はなかった。

テレビ番組名については記載がなかった。

3.2.6 日本語学習で困っていること

日本語学習で困っていることについて自由記述でたずねたところ、22人から回答が得られた⁴⁾。22人のコメントを分類すると、学習環境、会話・聴解、漢字学習の大きく3つに分けられる。これをまとめたのが表2である。

学習環境については先生がいなくて1人で学習する難しさ⁵⁾と仕事しながら勉強する難しさ、日本語については日本人との会話や漢字学習の難しさにかかわるコメントが多かった。

表2 日本語学習で困っていること

学習環境にかかわるコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 働く時間が長いから、勉強する時間が少なくなる。ほとんど自分で勉強するので難しい。(ベ) ・ 時間が足りない。1人で勉強するのが難しい。(ベ) ・ 勉強方法がわからない。(ベ) ・ 先生がいなくて、勉強する雰囲気もない。(中) ・ 先生がいない。(中) ・ 難しい。難しい。とても難しい。(中) ・ 勉強する時間がなく、働くのは疲れる。(中)
会話・聴解にかかわるコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本人と会話*(ベ) ・ 日本人と会話するのが難しい。(ベ) ・ 日本語の会話。(ベ) ・ 発音と会話が難しい。(ベ) ・ 話すのがはずかしい。(ベ) ・ 正しく発音できない。日本語を話すのがはずかしい。(ベ) ・ 聴解が難しい。日本人と話す機会がない。(ベ) ・ 日本語の発音が速くて聞き取れない。覚えられない。(ベ) ・ 相手の方が富山弁で話すから。(イ)
漢字学習にかかわるコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 漢字の勉強。(ベ) ・ 漢字が書けなくて覚えられない。(ベ) ・ 漢字と語彙と文法が覚えられない。(ベ) ・ kanji*(イ) ・ kanji ga wakaranai*(イ) ・ 漢字と文法が難しい。(イ)

*を付したコメントは日本語で書かれたもので、それ以外は実習生の母語で書かれたものを日本語に翻訳した。(ベ)はベトナム人実習生、(イ)はインドネシア人実習生、(中)は中国人実習生によるコメントを示す。

出身国別による違いも見られた。表2の学習環境にかかわる7つのコメントはベトナム人実習生3人と中国人実習生4人によるもので、中国人実習生は参加者7人中3人が先生がいなくて1人で学習する難しさに言及していた。会話・聴解にかかわる9つのコメントはベトナム人実習生8人とインドネシア人実習生1人によるもので、日本語で話す難しさに関するコメントはすべてベトナム人実習生によるものだった。漢字学習にかかわる6つのコメントはベトナム人実習生3人とインドネシア人実

習生3人によるもので、インドネシア人実習生は参加者4人中3人が漢字学習の難しさに言及していた。

3.2.7 公開講座でよかったもの

質問6「公開講座でよかったもの（①日本人学生との交流，②留学生との交流，③実習生との交流，④日本語教科書の紹介，⑤日本語学習サイト・アプリの紹介，⑥茶道，⑦書道，⑧折り紙，以上の8選択肢から複数回答）」では回答者全員が複数の項目を選択していた。8項目すべてを選択した人が11人（40.7%），7項目選択3人（11.1%），6項目1人（3.7%），5項目3人（11.1%），4項目5人（18.5%），3項目3人（11.1%），2項目1人（3.7%）だった。

交流に関する項目（①②③），教材紹介に関する項目（④⑤），そして，日本文化体験に関する項目（⑥⑦⑧）の3つに分けて見てみると，回答者27人全員（100%）が日本文化体験に関する項目の中から1項目以上を選択していた。交流に関する項目については26人（96.3%），教材紹介に関する項目については21人（77.8%）が1項目以上を選択していた。

次に，8項目それぞれについて見ていくと，最も評価が高かったのは日本人学生との交流24人（88.9%）だった。2位は留学生との交流23人（85.2%），3位は書道22人（81.5%）で，上位3つは回答者の8割以上が選択していた。続いて，茶道21人（77.8%），日本語学習サイト・アプリの紹介20人（74.1%），折り紙20人（74.1%），実習生との交流16人（59.3%），日本語教科書の紹介15人（55.6%）という結果だった（図2）。

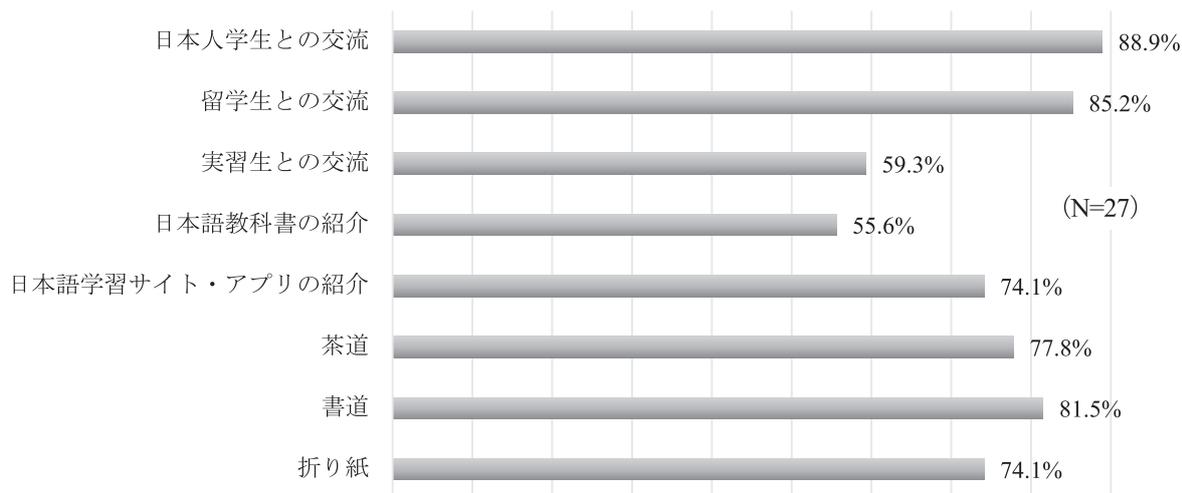


図2 公開講座でよかったもの（複数回答）

出身国別による違いも見られた。まず，日本人学生との交流，留学生との交流，実習生との交流の3つを取り出し比較すると，ベトナム人実習生は日本人学生との交流（93.8%）＞留学生との交流（81.3%）＞実習生との交流（68.8%），中国人実習生は日本人学生との交流（85.7%），留学生との交流（85.7%）＞実習生との交流（42.9%），インドネシア人実習生は留学生との交流（100%）＞日本人学生との交流（75.0%）＞実習生との交流（50.0%）だった。ベトナム人実習生は日本人学生との交流，インドネシア人実習生は留学生との交流を最も高く評価していた。

日本文化体験については，ベトナム人実習生は茶道（93.8%）＞書道（87.5%）＞折り紙（81.3%），中国人実習生は書道（71.4%）＞折り紙（57.1%）＞茶道（28.6%），インドネシア人実習生は茶道（100%）＞書道（75.0%），折り紙（75.0%）で，ベトナム人実習生とインドネシア人実習生は茶道，中国人実習

生は書道を最も高く評価していた。また、中国人実習生は上述の交流の評価と比べ、日本文化体験の評価は全体的に低く、特に茶道が低かった。

日本語学習教材の紹介については、ベトナム人実習生はサイト・アプリの紹介（81.3%）>教科書の紹介（56.3%）、中国人実習生はサイト・アプリの紹介（42.9%）、教科書の紹介（42.9%）、インドネシア人実習生はサイト・アプリの紹介（100%）>教科書の紹介（75.0%）で、ベトナム人実習生とインドネシア人実習生はサイト・アプリの紹介の評価が高いが、中国人実習生はサイト・アプリの紹介と教科書の紹介の評価に違いは見られず、いずれもほかの国の実習生と比べて低かった。

3.2.8 よかった理由

質問6「公開講座でよかったもの（選択・複数回答）」について、よかった理由を自由記述でたずねたところ、12人から回答が得られた。*を付したコメントは日本語で書かれたもので、それ以外は実習生の母語で書かれたものを日本語に翻訳した。

- ・このような講座をもっと開いてほしい。または、サークルがあったらいい。
- ・たのしかった*
- ・おもしろかった。
- ・日本人学生や留学生の日常生活がさらに理解できた。
- ・みんなと交流できて、日本についてたくさん勉強できました。
- ・みんなさんとはともしんせつだし ねっしんです*
- ・みんな親切です*
- ・留学生の態度がよかった。
- ・みんなと交流できて、日本の文化をたくさん勉強できました。
- ・日本人学生の態度が友好的でよかった。留学生も配慮してくれて、書道が楽しかった。
- ・日本の文化を紹介してくれたから。
- ・とてもいい講座で、いい一日でした。みんな親切で、やさしくて、日本語学習サイトがたくさんわかりました。

上述の通り質問6では全員が複数の項目を選択していたことから、特定の項目についてのコメントというよりも、公開講座全体に対するコメントや日本人学生と留学生の親しみやすい態度を評価するコメントが多かった。

3.3 まとめ

本公開講座は、初級レベルの日本語力を有する実習生を対象として行ったこともあり、今回の受講者アンケートから富山の实習生の全体的傾向を把握することはできないが、来日前の日本語学習期間は1年以下、6割強が半年以下で、来日後は大半が独学でスマートフォンや教科書で日本語学習を行っていることがわかった。スマートフォンでは「YouTube」と「Mazzi」（ベトナム人学習者向けの日本語学習アプリ）、教科書は『みんなの日本語初級』と日本語能力試験対策の問題集を使っている実習生が複数見られた。中川・神谷（2018）による農場で働くベトナム人実習生6人への聞き取り調査でも「今回の聞き取り調査で興味深かったのは、実習生の口から常にN3、N2など日本語能力試験の目標が出てきたことである。（中略）日本語能力試験N2、N1等中上級レベルの受験のため、＜漢字や文章読解を学習できる教材がほしい＞（実習生全員）との声もあった」（p.93）とあり、富山でも日本語能力試験合格を目指す実習生が一定数いると思われる。

日本語学習で困っていることとして、学習環境については1人で学習する難しさや仕事しながら継

続する難しさ、日本語については日本人との会話の難しさや漢字学習の難しさにかかわるコメントが多く見られた。

公開講座でよかったものとしては、日本文化体験については27人全員(100%)、日本人学生、留学生との交流については26人(96.3%)、日本語学習教材の紹介については21人(77.8%)が選択していた。公開講座の前半にグループに分かれて、日本語で会話しながら初対面の緊張感をほぐしたあと、後半の日本文化体験で日本人学生が講師、留学生がアシスタントを務め、実習生とともに文化体験を行う中で、さらに距離を縮めることができたのではないと思われる。日本語学習教材の紹介についてはほかと比べると評価が低かったが、今回の調査で日本語能力試験に関心を持つ実習生や、漢字学習に困難を感じる実習生がいることがわかったので、内容について再検討したい。

4 おわりに

本公開講座の実施により、大学で実習生の日本語学習を支援するための手かがりを見出すことができた。日本人大学生や留学生との交流を通じて、実習生に日本語で話す場を提供するという方法は、富山大学の学生にとっても実習生を通じて在留外国人や地域社会のことを知るいい機会だと思われる。アンケート調査の結果、日本語能力試験合格を目指す実習生がいることもわかったため、そのような実習生にどのような支援が可能かを検討していきたい。

付記 本公開講座は、富山大学令和元年度学長裁量経費(教育研究活性化等経費)「日本語教育推進法成立(6.21)を受けての、地域・外国人労働者むけ日本語公開講座の需要調査と試行」の助成を受けて開催した。

注

- 1) 「やさしい日本語」とは、外国人にわかりやすいように配慮した日本語のことである。最初は災害時のことばとして考案され(佐藤(1996))、その後、災害時以外でも「やさしい日本語」が注目されるようになった。出入国在留管理庁・文化庁が2020年8月に発表した「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」では、「やさしい日本語は、難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語のことです。日本語の持つ美しさや豊かさを軽視するものではなく、外国人、高齢者や障害のある人など、多くの人に日本語を使ってわかりやすく伝えようとするものです」とあり、対象を外国人以外にも広げて普及が進められている。
- 2) 助川・吹原(2017)でインドネシア人技能実習生への聞き取り調査をもとに、NHKが作成した日本語学習アプリ「Belajar Bahasa Jepang」(日本語の勉強)がインドネシア語によるFAQもあって使いやすいと評判であること、そしてこのアプリが茨城県大洗町における日本語研修で教材として使用されていることが紹介されている。漢字の辞書についても「Kanji Lookup」という手書き文字認識と英語訳機能のあるアプリが人気があると報告されていることから、「jisho」は「Kanji Lookup」を指す可能性もある。
- 3) 日本語能力試験N3の問題集のことだと思われる。
- 4) ほかの5人は、無記入3人、「今はない」1人、「天気」1人だった。「天気」はおそらく富山の生活において困っていると読み違えて書いたものと思われるため、分析の対象から外した。
- 5) 荒島・吉川(2019)では、技能実習生が受け入れ企業に配属されたあとの日本語学習は義務づけられていないため、入国後の講習で積極的に自律学習を取り入れたり、受け入れ企業に日本語学習の必要性を理解してもらい、eラーニング導入を勧めるなどして、実習生が自律的継続的に日本語学習に取り組めるように改善していく必要性について指摘されている。

参考文献

- (1) 荒島和子・吉川夏渚子（2019）「外国人技能実習制度における監理団体での日本語教育の役割—ある監理団体へのインタビューをもとに—」『日本語・日本文化研究』29, pp.139-156
- (2) 厚生労働省発表 令和2年1月31日「『外国人雇用状況』の届出状況【概要版】（令和元年10月末現在）」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/000590309.pdf>（2020年10月28日最終閲覧）
- (3) 厚生労働省 富山労働局発表 令和2年1月31日「富山県における外国人雇用状況の届出状況（令和元年10月末現在）」
<https://jsite.mhlw.go.jp/toyama-roudoukyoku/content/contents/000593169.pdf>（2020年10月28日最終閲覧）
- (4) 佐藤和之（1996）「外国人のための災害時のことば Easy Japanese の提唱とラジオの効用」『言語』第25巻第2号, pp.94-101
- (5) 出入国在留管理庁・文化庁（2020）「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」
<http://www.moj.go.jp/content/001327230.pdf>（2020年10月28日最終閲覧）
- (6) 助川康彦・吹原豊（2017）「インドネシア人技能実習生の受け入れと日本語教育」, 田尻英三編『外国人労働者受け入れと日本語教育』ひつじ書房, pp.111-133
- (7) 田中信之・濱田美和・副島健治（2021）「富山県における外国人労働者を対象とした日本語教育の調査」『富山大学国際機構紀要』第3号, pp.1-10
- (8) 富山県 平成31年3月策定「新・富山県ものづくり産業未来戦略 第2章 最近のものづくり産業を取り巻く環境と本県ものづくり産業の強み」
http://www.pref.toyama.jp/cms_pfile/00020241/01230140.pdf（2020年10月28日最終閲覧）
- (9) 富山県ホームページ>多文化共生の地域づくり http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1018/kj00013994-002-01.html（2020年10月28日最終閲覧）
- (10) 中川かず子・神谷順子（2018）「北海道におけるベトナム人技能実習生の日本語学習意識と学習環境—多文化共生の視点からの考察—」『開発論集』第102号, pp.79-98